

島浦町漁業後継者部・離島 島野浦いきいき観光協議会・島野浦未来会議

関係人口を巻き込み

漁業を核とした島づくりを推進

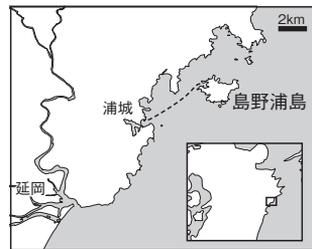
— 特産品開発、観光業への展開

本土にほど近い漁業の島

島野浦島は、県内最大の有人島で、本土からは最短距離で四キロ、定期船でわずか一〇分の日向灘に位置しています。参勤交代時の寄港地となるなど、さまざまな人が島を訪れていたために、今なお本土とは違う方言や文化、生活習慣が残っています。昭和三〇年のピーク時には人口二五二三人を数えましたが、現在は八二六人(令和二年五月)と大幅に減少しています。

島全域が日豊海岸国定公園に属し、黒潮の恩恵を受けて育まれた海には国内最大級のオオスリバチサングの群生がみられ、ダイビングスポットとして知られているほか、釣り人にも人気のある島です。国土交通省の「島の宝1000景」に選出されている島野浦神社秋季大祭や、「しま山

大谷 真怜



島野浦島：延岡市の中心部から北東に約12kmの日向灘にある島。面積2.84km²、周囲15.5km、人口826人(令和2年5月1日現在)。全体に切り立った地形で、西側の漁港周辺に住宅が密集している。島の周囲は変化に富んだリアス式海岸で日豊海岸国定公園の一部となっている。

100選」に選定された島内最高峰の遠見場山など、祭事や自然などのみどころも数多く有しています。

古くから水産業と水産加工業を柱として成り立ってきた島であり、最盛期はウルメイワシの漁獲高が日本一を誇り「イワシの舞う島」と呼ばれたこともありました。しかし、近年は漁獲の減少や原油高騰、後継者不足といった課題が顕在化してきています。

この現状を打開すべく、島の有志が島外の人々も巻き込みながら、地域資源(特に水産資源)を活かした関係人口づくりに取り組み始めています。今回は、若い漁業関係者が集い水産業による島の活性化を目指す「島浦町漁業後継者部」^{しまのうらしま}、住民の案内による自然・文化の体験型ツアーを企画・実行する「離島 島野浦いきいき観光協議会」の取り組みや、島野浦島に興味のある島内外の人々を募り、話し合いなど



島の宝100景に選出されている島野浦神社秋季大祭。

を通じて島の将来を考えていく「島野浦未来会議」について紹介します。

特産物の開発などに取り組む漁業後継者部

島浦町漁協の青壮年部にあたる組織として発足した島浦町漁業後継者部（以下、漁業後継者部）は、若手漁業者、漁協職員で構成されています。旋網・定置網・一本釣・刺網・

養殖業などを行なう漁業者がおもなメンバーです。島に活気があふれていた頃は、漁業以外にも合コン（婚活）イベントやカラオケ大会といった親睦会など、多岐にわたり活動していました。漁獲の減少や漁業者の高齢化によって縮小、実質的な動きがなくなってきました。この状況に変化

が生じたのが一〇年前。当時、部長を務めていた旋網漁業を営む西口良満さん（西良水産専務取締役）が、自身の結婚などをきっかけに島の将来について考えはじめ、宮崎県漁連青壮年部の活動に精力的に関わっていったことが発端です。良満さんは「島に漁業以外でも生計を立てていける選択肢をつくり、これまで受け継いできた島を次世代へ残していきたい。島外に出た人が帰ってこれる場所にしたかった」と、当時を振り返ります。

その後、良満さんは、水産庁の離島漁業再生支援交付金を活用した水産業の活性化に取り組みはじめ、四年前には簡易加工場を整備、真空パックの機械を導入し付加価値をつけた新鮮な魚介類の販売ができるようになりました。また、保冷機能のある移動販売車で本土側のイベントに出店したり、山間部にある「高千穂がまだせ市場」への出荷なども行なっています。

平成三〇年にはクラウドファンディングで調達した資金を活用し、漁業体験イベント「一日しまたび」を実施しました。当時大学院生だった筆者が島野浦島に関わりはじめたのもこの頃です。

令和二年一月、養殖業を営む木下拓磨さん（木下水産専務取締役）へ部長のバトンが受け継がれました。今後、加工品製造の許可を得た施設も新たに完成する予定で、鮮魚だけでなく加工品や特産物の開発に向けた取り組みが続けられています。

交流の促進による島づくりを目指す観光協議会

島の自然と文化を生かした体験型観光に取り組み、都市との交流の促進による活力のある島づくりを図ることを目的に、平成二四年五月に発足したのが「離島 島野浦いきいき観光協議会（以下、観光協議会）」です。この協議会のおもな活動は、①ウェブなどでの魅力ある「島野浦」の情報発信、②ガイドボランティアの養成、③漁家民泊の推進、④イベントの開催などによる交流の促進。このうち③④につ



好評を博しているツツジトレッキングツアー。

いては、住民が中心となつて、観音巡りやトレッキングのほか、手漕ぎ船でのサング見学、魚釣りやシーカヤック体験などのブルーツーリズムを提供しています。とくに四月ごろに実施している「ツツジトレッキングツアー」は、毎年一〇〇名近くの参加者を集め、好評を博しています。筆者も令和元

年より魚釣り体験を担当しており、魚に触れたことがなく苦手意識を持つている初心者にも満足していただけるよう心がけています。

これらの企画は、元島浦町漁協参事の結城豊廣とよひろさんが事務局を務め、住民の方々に対応を依頼する流れとなっています。豊廣さんは、漁協職員だった頃から補助金の申請などを通じて積極的に島づくりに携わっており、ご自身も多クツアーを担当されています。

今後の課題について豊廣さんは、「ほとんどの住民が仕事や家事の片手間で活動しているのが実情。継続的に続けていくためには組織の法人化、利益を生む体制の整備、活動を引き継いでくれる若手の存在が必要だ」と、指摘しています。

島の行く末を考え、実践する未来会議

島野浦未来会議（以下、未来会議）は、平成二八年一月から不定期に実施しているワークショップです。メンバーは、島に縁のある島内外の有志たち。市の予算でコーディネート者を招聘して開催した初回のワークショップでは、参加者が島のビジョンについて議論し、現状の課題や取り組んでいきたいことを提案しました。その結果、実現したのが、前述の漁業後継者部と観光協議会とのコラボレーションによる、ツツジトレッキングに海鮮バイキングを組み合わせたツアーです。これは、これまで年輩の方々が山道



ワークショップ「島野浦未来会議」には若手から中堅まで幅広い年代の住民が参加している。



しまのうら島旅ではシーカヤック体験を実施した。

整備やトレッキングのガイドなどを行なっていたイベントに、島の郷土料理などの食事を取り入れた企画で、参加者からは非常に好評でした。

「しまのうら島旅」と称して参加者を募り、ビーチでシーカヤックや海鮮バーベキューを行なう日帰りツアーも実施しました。運営費の一部をクラウドファンディングで集めることで、参加者のみならず寄附者（出資者）に対しても島の宣伝をすることができました。発案は、養殖業を営む

結城嘉朗さん（結城水産専務取締役）で、現在、未来会議の代表も務めています。嘉朗さんは、理想とする漁業のあり方を実現したいと、実家の養殖業を承継したそうです。島をもっと元気に盛り上げていきたいという思いが強く、これまで紹介した組織や会議のすべてに関わっている、島野浦の若手キーマンの一人です。

また、未来会議では、「南九州移住ドラフト会議2018」に宮崎県島野浦チームとして参加しました。このドラフト会議は、会場に集った地域と移住希望者が互いにプレゼンを行なった上で、地域が希望者を指名するという面白い企画で、未来会議では、島外へ情報を発信しながら島の関係人口を増やす活動の一貫として位置づけています。結城さんは「島を知って、魅力を感じてもらい、移住でなくともお手伝い程度でも島に関わってほしい」と、話しています。

このほか未来会議の生みの親である延岡市役所職員の三浦久知さんが、この会議での話し合いやツアーの実施をきっかけに、「島で学ぶことを通じて、もっと島に関わる人を増やしたい」と考え、「延岡しまん大学（カコミ参照）」を開講するなど、新たな動きにもつながっています。

各組織の連携強化による関係人口増を目指して

島野浦島は、水産業を柱とした産業構造が現在でも引き継がれています。子どもたちのなかには、島の姿に魅力を感じることなく、高校進学を機に島外へ出て、そのまま行ったきりとなってしまいうケースもみられます。漁業者となる若者は、家業の継承として戻ってきているUターン者が多く、島のほとんどの船や加工場は、親族中心の経営で支えられています。

前述のとおり、島の観光分野では生計を立てられるほど、収益性のある事業はまだできていません。漁業以外に仕事がなく、島外の人はもちろん島の方々も漁業や水産加工業以外の就職先を選べない現状です。島に嫁いできた人も、それ以外の業種での就業を望む場合は、島外へ働きに出なければなりません。この状況を打破し、島から出て行った人を呼び戻すためには、これまでとは違う漁業のあり方を模索するか、水産業以外の仕事を生み出していくことが求められています。

今回紹介した各種の活動によって、島野浦島に注目が集まり、認知度も上がってきているように感じています。実際、これらの取り組みを契機に、結城水産や木下水産（とにも養殖業）では、漁場の見学や餌やり体験などを開始するなど、新たな挑戦を始めています。

また、これまで取り組んできたブルーツーリズム以外に

も、個人的なつながりなどから島に興味を示す人たちも増えてきました。未来会議などを通して、なんとか島を盛り上げていきたいと奮闘する地元住民や漁業者と、島野浦に関心のある島外の方々が漁業以外で関わりを持つこともできており、島を盛り上げる機運の高まりを感じています。今後、これらの取り組みをさらに発展させていくためには、漁業後継者部・観光協議会・未来会議がより親密に携していくと同時に、行政や島外の方々がもつと関わっていきけるような仕組みづくりが必要なのだと思います。

筆者は、結城嘉朗さんや三浦久知さんとの出会いから島野浦と関わりを持ち、島の住人の熱意と言葉だけではない行動力に魅かれ、移住するまでになりました。地域に溶け込み、いろいろな経験を積みながら、自分にできることを模索し、島の未来づくりに携わり続けていきたいと思っています。



大谷真怜（おおたに まさと）

平成2年三重県桑名市生まれ。幼い頃から魚が大好きで、憧れの釣り師がいる宮崎へ。宮崎大学農学部卒、同大学院修了。平成30年に初めて島野浦島を訪れ、翌31年の結城水産への入社とともに島へ移住。辛い経験もあるが、自分にできることを模索しながら島に

さまざまな取り組みが進行する島野浦島

■「島業」推進協議会

急激な高齢化と人口の減少、担い手不足などの現状を分析して活性化策を協議するため、平成30年7月に発足。島浦町区長、島浦町漁協組合長、離島漁業再生協議会代表、未来会議代表、離島振興推進員などが構成員で、市役所の地域・離島・交通政策課が事務局としてサポートしている。

協議会は、同30年度に福岡県宗像市の大島・地島を視察し、離島留学制度や島野浦島にはない飲食店の運営などについて重点的に見学。令和元年度にはビジネスプランコンテストを開催した。今年度は、アイランダーへの出展も計画している。

会長の岩谷勇島浦町区長は「島を今まで支えてきた漁業への支援を第一に、他島の事例を参考にしながら観光業なども活性化させたい。島を離れた方々が戻ってくることができて、島でずっと生活をしてきた年配者も暮らしやすい思いやりのある島を目指したい」と話す。

■ビジネスプランコンテスト

「島業」推進協議会の主催により、島野浦島の活性化につなげるための新規事業プランを募集。地元大学生や関東などから多数の応募があった。宮崎大学の川田美琴さんがコンテストの参加をきっかけに「延岡しまん大学」のメンバーに入り、友人ともども島の活動に携わっている。

コンテストの最優秀賞は、延岡市街地でコワーキングスナックを運営する甲斐慶太郎さんが提案した「満月食堂」。飲食店のない島に、昭和の満月の頃の賑わいを取り戻したいと、実際に開店に向けた準備を進めている。



ビジネスプランコンテストにあわせて来島した鹿児島県上飯島の山下賢太(中央)さんを出迎える結城豊廣さん(左)と結城嘉朗さん。

■延岡しまん大学

平成30年に開講。島野浦島全体をキャンパスと見立て、自然や文化など島の資源を学習教材に、地域課題の解決などについて考えるソーシャル系大学で、毎回の講義に講師を招き、島で実施している。講師・生徒ともに島野浦に惹かれたさまざまな方が任意で集まっており、島外の視点を活かした活動に結びつけている。筆者は、第1回講師として魚の捌き方教室を開催。生徒(参加者)からはすこぶる好評だった。

学長を務める延岡市役所の三浦久知さんは、「島野浦には活発に活動する組織やアイデアがあるのに、実際に動ける人がいない。そこを解決できる人材を引き出すことがこの大学の目標」と話す。



延岡しまん大学第1回は筆者(中央)が講師となって魚捌き体験を行なった。